

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第72集

ICHI MICHI

# 市道遺跡Ⅱ

長野県佐久市三塚市道遺跡Ⅱ発掘調査報告書

1999,3

ルートイン佐久株式会社  
佐久市教育委員会



市道遺跡Ⅱ及び遺跡周辺全景（朝日航洋株式会社撮影）

## 市道遺跡Ⅱの調査について

市道遺跡Ⅱは千曲川の西方、佐久市大字三塚字市道に所在します。遺跡周辺は圃場整備が終了した水田が広がりのどかな田園風景となっています。しかし、遺跡の東側では近年に国道141号線と142号線のバイパスが建設され、交通の要衝となりつつあります。奇しくも字名「市道」に関連するかのような変ほうぶりです。

今回の調査は760㎡という狭い範囲の発掘調査でしたが、古墳時代後期(約1500年前頃)から平安時代に及ぶ竪穴住居址と呼ばれる家の跡が5軒も発見されました。中でも注目される発見としては圃場整備以前に使われていた用水路が古代にも同じルートで使われていたことが解ったことです。この事は古代においても、遺跡周辺が同じように水田耕作可能で、自然災害の少ない安定した土地であったことを私たちに教えてくれます。あるいは、古代においても今と同じ様な美しい田園風景がすでに広がっていたのかもしれません。



H3号住居址

調査風景(北より)



H3号住居址調査風景



H3号住居址カマド



市道遺跡Ⅱ調査区全景（株式会社 みすず総合コンサルタント撮影）



H 5号住居址出土遺物



遺跡出土陶磁器類

(スケール約 $\frac{1}{2}$ )

- 1～4. 青磁碗
5. 青磁連弁文碗
6. 青磁碗
7. 青磁連弁文碗
8. 青磁碗
9. 染付け碗
10. 染付け小碗
11. 染付け蓋物
12. 染付け皿
13. 染付け仏花瓶
14. 片口
15. 灰釉碗
16. 灰釉碗
17. 灯明皿
18. 灰釉鉢
19. 摺り鉢

14は試掘時に出土

その他はM1溝状遺構出土

例

1. 本書は、ルートイン佐久株式会社が「ルートイン佐久」ホテル建設に伴う、埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。なお保護協議の結果、開発対象面積の内、駐車場は発掘対象区から除外し建物部分と浄化槽部分について本調査をおこなった。
2. 調査委託者                    ルートイン佐久株式会社
3. 調査受託者                    佐久市教育委員会
4. 遺 跡 名                      市道遺跡Ⅱ (IMⅡ)
5. 所在地籍                      佐久市大字三塚字市道126-1 他2筆
6. 調査期間                      発掘調査    平成10年6月22日～7月29日  
整理期間    平成10年8月7日～平成11年3月31日
7. 面 積                        開発面積    2230㎡  
調査面積    760㎡
8. 本書の編集は富沢が行った。
9. 本書及び市道遺跡Ⅱ出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

例

1. 遺構の略記号は、住居址 (H)・掘立柱建物址 (F)・土坑 (D) である。
2. 挿図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については挿図中にスケールを示す。  
    竪穴住居址・掘立柱建物址1/80    カマド1/40    土坑1/60    土器・石器1/4
3. 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」として示した。
4. 土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
5. 遺物挿図番号と遺物写真番号及び遺物観察表番号は一致する。
6. 調査区グリッドは公共座標に従い、間隔は4×4mに設定した。
7. 住居址の面積は床面積(住居址下端範囲)を測定し、カマド部分は測定値より除外してある。
8. 遺構は報告書作成時に新番号を付けた(H4→H3, H5→H4, H6→H5)。
9. 挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。

〔遺 構〕		地山断面		カマド範囲		貼 床
		焼土範囲		粘 土		
〔遺 物〕		黒色処理		須恵器断面		

## 目 次

巻頭カラー図版	
例言・凡例	
第I章 発掘調査の経緯	
第1節 発掘調査の経緯と経過	1
第2節 調査の体制	2
第3節 調査日誌	2
第II章 遺跡の環境	
第1節 自然的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第III章 遺跡の基本層序と概要	
第1節 基本層序	7
第2節 検出遺構・遺物の概要	7
第IV章 遺構と遺物	
第1節 竪穴住居址	
(1) H 1号住居址	9
(2) H 2号住居址	11
(3) H 3号住居址	12
(4) H 4号住居址	17
(5) H 5号住居址	20
第2節 掘立柱建物址	
(1) F 1号掘立柱建物址	24
(2) F 2号掘立柱建物址	24
(3) F 3号掘立柱建物址	25
(4) F 4号掘立柱建物址	26
第3節 土坑	
(1) D 1号土坑	27
(2) D 2号土坑	27
(3) D 3号土坑	27
(4) D 4号土坑	28
(5) D 5号土坑	29
(6) D 6号土坑	29
(7) D 7号土坑	29
(8) D 8号土坑	29
(9) D 9号土坑	29
(10) D 10号土坑	29
第4節 溝状遺構	
(1) M1号溝状遺構	31
(2) M2号溝状遺構	31
(3) M3号溝状遺構	37
第5節 遺構外出土遺物	34
第V章 調査のまとめ	35
遺物観察表	
写真図版	

# 第I章 発掘調査の経緯

## 第1節 発掘調査の経緯と経過 (第1図)



市道遺跡IIが存在する市道遺跡は、佐久市大字三塚地籍に所在し、千曲川と片貝川に挟まれた標高666m内外を測る沖積微高地に位置する。遺跡周辺は、圃場整備が終了した水田が広がり、佐久平において有数の穀倉地帯を形成している。

今回、遺跡内においてルートイン佐久株式会社がホテル建設を計画され、佐久市教育委員会に遺跡の有無の照会があった。教育委員会では市道遺跡が所在するため、まず試掘調査を行う事とした。その結果、今回の開発地籍全体におよんで竪穴住居址・ピット及び土師器・須恵器片が多数検出された。よって、ルートイン佐久株式会社と佐久市教育委員会において協議をおこなった結果、設計変更は難しく遺跡の破壊が余儀なくなり、佐久市教育委員会埋蔵文化財課において記録保存を目的とする本調査が実施されるはこびとなった。



第1図 市道遺跡II位置図(1:50,000)



## 第2節 調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会						
	教 育 長	依田英夫					
事 務 局	教 育 次 長	北沢 馨					
	埋蔵文化財課長	須江胤仁					
	埋蔵文化財係長	萩原一馬					
	埋 蔵 文 化 財 係	林 幸彦	三石宗一	須藤隆司	小林真寿		
		羽毛田卓也	富沢一明	上原 学			
	調 査 担 当 者	富沢 一明					
	調 査 員	遠藤しづか	堀 寛 因	橋詰勝子	橋詰けさよ		
		渡邊久美子	岩下古代	岩下友子	岩下文子		
		依田みち	田中章雄	井出徳四朗	花岡文夫		
		大井みつる	橋詰信子	金森治代	堺 益子		

## 第3節 調査日誌

平成10年度

1998年6月22日	重機による表土はぎを開始。
6月29日～	調査開始 遺構確認を行う。
7月1日	調査区南側より遺構掘り下げを開始する。
7月29日	ラジコンによる航空測量を行う。 現場での作業を終了し、機材を撤収する。
8月7日	室内にて整理作業開始 出土遺物洗浄を行う。
1999年3月31日	原稿を執筆し、報告書を刊行する。



重機による表土剥ぎ状況



調査風景(北より)

## 第II章 遺跡の環境

### 第1節 自然的環境 (第2図)

市道遺跡IIが所在する佐久市三塚地籍は佐久平の南西よりに位置し、西方700mに片貝川が、東方1300mに千曲川がそれぞれ北流し、周辺は水田地帯となっている。この片貝川は、八ヶ岳山塊の一つである双子山(2223m)より源を発する大曲川・居川・倉沢川などの中小河川を集め、白田町の勝間地籍より流れを北に変え、山裾を沿うように北流し、佐久市下県地籍で千曲川に合流する河川である。当遺跡周辺に広がるほとんどの水田は、現在この片貝川より取り入れた水によって稲作を行っている。遺跡周辺は現在水田が広がっているが、圃場整備前は畑地が広がり周辺の水田面より約1m程高く、南北300m・東西200mほどの広さの沖積微高地を形成していた(第3図参照)。今回調査された場所は微高地の東端にあたり、調査区内も北東側に緩やかに傾斜していることが確認された。

当遺跡の西側には昭和49年度に圃場整備に伴い市道遺跡が調査されている。検出遺構は古墳時代中期から平安時代の整穴住居址10軒、特殊遺構、土坑等である。この調査は昭和46年度に調査された跡部町田遺跡・中道遺跡と並び、佐久市南部の沖積地における埋蔵文化財調査の先駆けとなり、以後の佐久市における文化財保護の推進にあたり意義深い経験を残した。



第2図 市道遺跡II周辺地形図(1:5,000)

## 第2節 歴史的環境 (第4・5図, 第1表)

本遺跡が所在する三塚地籍及びその周辺の野沢・前山・小宮山・桜井地区には、東に傾斜する山地や山裾、また沖積低地に数多くの遺跡が散在する。これらの遺跡を時代別に概観したい。

まず、先土器時代の遺跡としては、当遺跡南西方向6kmの八ヶ岳北東山麓中に立科F遺跡(1)がある。本遺跡からは211点からなる石器群が検出され、検出層位より31200年±900年前の年代が与えられている。続く縄文時代の遺跡としては、前期前半の住居址6軒が調査された後沢遺跡(2)、中期後半の住居址16軒が調査された中村遺跡(3)、筒村B・山法師B遺跡(4)などがある。また、前山地籍の麓の下遺跡(5)からは、後期の敷石住居址2軒が検出され、そのうち1号住居址の敷石は炉の周辺に菱形に敷かれていた。周辺地域の縄文時代の遺跡は、その多くが山地沿いの谷間か、水田面に接する山裾周辺に広がっており、沖積低地での集落址は未だ発見されていない。

次に弥生時代の遺跡としては、水田面を見下ろす丘陵上に位置する後沢遺跡で中期栗林期3軒、後期箱清水期32軒の住居址、方形周溝墓3基が調査されている。また、同じ様な地形にある西裏・竹田峯遺跡(6)からは中期栗林期9軒、後期箱清水期5軒の住居址とともに、後期に比定される壺棺が検出され、壺内より胎児骨一体と管玉・ガラス小玉が発見された。また、当遺跡からは、円形周溝墓と考えられる遺構も確認されており、後沢遺跡も含め小地域内での墓制の多様性を考える上で貴重な資料となっている。

古墳時代になると遺跡は沖積低地まで広がり始める。圃場整備などで調査された遺跡も多く、中道遺跡(7)、市道遺跡(8)、三塚町田遺跡(9)、跡部町田遺跡(10)、三塚鶴田遺跡(11)、上桜井北遺跡(12)、寺添遺跡(16)などが上げられる。これらの遺跡はいずれも自然堤防上や微高地上に立地しており、中期後半から後期におよぶ集落址である。古墳址は調査されたものは少なく、根岸地籍の榛名平・坪の内遺跡(13)で後期から終末期に属する横穴式石室の古墳址が1基と坪の内古墳が調査されたにとどまっている。なお、佐久平においては、千曲川西岸の山地に古墳址が少なく、千曲川東岸の山裾に群集墳が集中して存在するという極めて対照的な様相を示している。

次に、奈良・平安時代は前代と同様な様相を示し、低地と山裾に小規模な集落址が確認されている。しかし、調査された遺跡範囲がいずれも小規模である為、今後、岩村田地籍の聖原遺跡のような大規模な集落址が発見される可能性はある。また、中道遺跡と榛名平遺跡からは奈良三彩の蓋が出土しており注目される。

鎌倉時代以降になると当地域では伴野氏の活躍が始まる。方形の区画を持つ野沢館跡(14)や山城として良好な保存状態を保つ前山城跡(15)は伴野氏によって築かれたものとされ、「一遍上人絵伝」にも当時の伴野市の活況の様子が描かれている。また、榛名平遺跡からは中世後期と考えられる土墳墓・火葬墓といった墳墓群が検出されている。



第3図 周辺遺跡位置図(1) (1:10,000)



第4図 周辺遺跡位置図(2) (1:50,000)

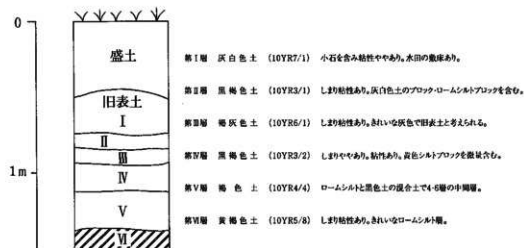
周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	立地	縄	弥	古	歴	中	備考
1	立科F遺跡	前山字立科	山地						平成2年調査
2	後沢遺跡	小宮山字後沢	丘陵	○	○	○	○		昭和51・52年調査
3	中村遺跡	根岸字日向	山地	○					昭和57年調査
4	筒村B・山法師B遺跡	根岸字日向	山地	○				○	平成2・3年調査
5	蔵の下遺跡	前山字蔵の下	丘陵	○					平成2年調査
6	西裏・竹田峯遺跡	根岸字西浦・竹田峯	丘陵先端		○	○	○		昭和60年調査
7	中道遺跡	前山字中道	沖積微高地				○		昭和46年調査
8	市道遺跡	三塚字市道	沖積微高地			○	○		昭和49年調査
9	三塚町田遺跡	三塚字町田	沖積微高地			○			昭和50年調査
10	跡部町田遺跡	跡部字町田	沖積微高地			○			昭和46年調査
11	三塚鶴田遺跡	三塚字鶴田	沖積微高地				○		昭和50年調査
12	上桜井北遺跡	桜井字橋詰	沖積微高地			○	○		昭和52年調査
13	樓名平・坪の内遺跡	根岸字樓名平・坪の内	丘陵	○	○	○	○		平成5・6年調査
14	野沢跡跡	野沢字尻尾敷・北田	沖積微高地			○	○		
15	前山城跡	富山字城山	山地				○	○	
16	寺添遺跡	三塚字寺添	沖積微高地			○	○	○	平成6年調査

## 第III章 基本層序と概要

### 第1節 基本層序 (第5図)

本遺跡における基本層序は近年の盛り土を除き6層に分かれている。I・II層は圃場整備による盛り土と考えられ、III層が圃場整備以前の畑地面で、V層が遺構確認面であった。



第5図 基本層序模式図

### 第2節 検出遺構・遺物の概要 (第6図)

#### 検出遺構

竪穴住居址	5軒	古墳時代後期 (6世紀代)	2軒
		奈良時代 (8世紀代)	3軒

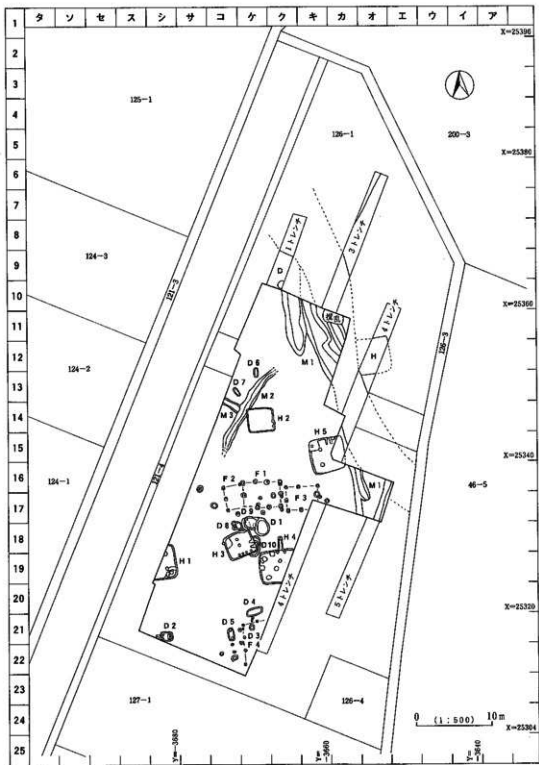
掘立柱建物址 4棟

溝状遺構 3本

土坑 10基

#### 出土遺物

土師器・須恵器・石器・青磁器片・近世陶器類

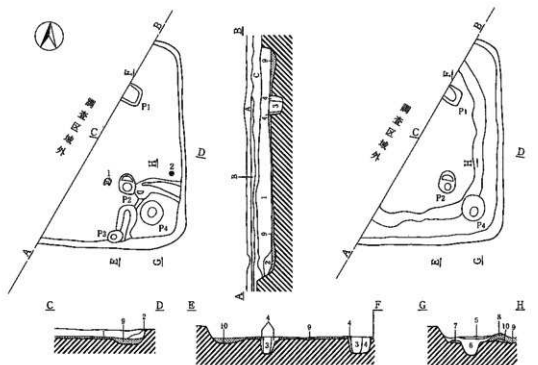


第6図 市道遺跡II調査区全体図

## 第IV章 遺構と遺物

### 第1節 竪穴住居址

#### (1) H1号住居址 (第7.8図, 写真図版一・二)



- A帯 褐灰色土 (10YR4/1) 水田耕作土。  
 B帯 黄褐色土 (10YR5/8) 水田敷床。  
 C帯 黒褐色土 (10YR3/1) しりり、粘性あり、白色の粒子・炭化物を含む。  
 1帯 黒色土 (10YR2/1) しりり、粘性あり、炭化物・褐灰色土ブロックを含む。  
 2帯 黒色土 (10YR2/1) しりり、粘性あり、黄色のシルトブロックを含む。  
 3帯 黒褐色土 (10YR3/1) しりり弱く、粘性あり、炭土粒子・炭化物を含む。  
 4帯 暗褐色土 (10YR3/4) しりり、粘性あり、黄色のシルトブロックを含む。  
 5帯 黒褐色土 (10YR3/2) しりり、粘性あり、炭化物を含む。  
 6帯 黒色土 (10YR2/1) しりり、粘性あり、炭化物を微量含む。  
 7帯 暗褐色土 (10YR3/4) しりり、粘性ややあり、黄色シルトブロックを含む。  
 8帯 褐色土 (10YR4/6) しりり、粘性あり、ロームブロックと黒色土の混合同上。  
 9帯 黒褐色土 (10YR3/1) 陥床。しりり、粘性あり、黄色シルトブロックを含む。  
 10帯 暗褐色土 (10YR3/4) 陥床。しりり、粘性あり、褐色土のブロックを含む。

第7図 H1号住居址実測図

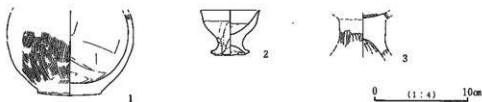


本住居址は、調査区西よりシー-18.19Grに位置する。残存状態は西側が調査区外となるため住居址全体の半分ほどが検出されたに止まった。

形態は、ほぼ方形を呈すると考えられる。規模は東壁4m・南壁2.9m(検出部分)で、壁高さは14cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-7°-Wを示す。住居址の床面積は検出部で7.1㎡を測る。覆土は2層に別れる。床は住居址中央部にかけて硬質であり、貼床は厚い所で10cm程に施されており黒色土と黄色土の混合土で構築されていた。住居址中央部の貼床は非常に薄く地山を敲いて踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。柱穴は2カ所確認され径は何れも40cm程で、深さはP1が32cm、P2が33cmを測る。

また、本址は住居址南東コーナーに貯蔵穴と考えられる施設が確認された。施設は直径50cmで深さ52cmのビットを囲む様に長さ95cmと60cmで高さ3cmの土手が囲む。土手は北西の部分で一部とぎれていた。ビット内から土器等は検出されなかったが、覆土中より炭化物が検出されている。掘り方は住居中央部を掘り残す状態で、壁際が一段深くなっていた。この掘り方は住居址西側でわずかに広がり始める為、或いは南西コーナー部にさしかかっているものとも思われ、だとすれば本址の全体面積は13㎡程になると考えられる。

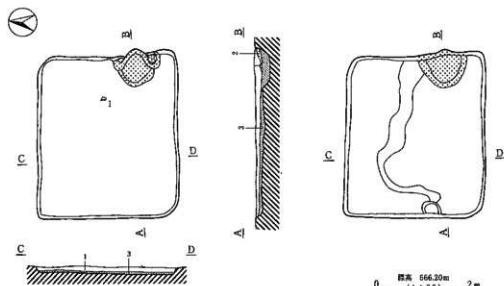
出土遺物は覆土中のものがほとんどで土師器甕・壺類であった。図示した1は土師器甕の胴部から底部で住居址の床面から出土した。調整は外面が刷毛目の残るナデで内面がヘラナデが施されている。2は手捏土器で高杯を模した物と考えられる。貯蔵穴北側の床面より出土した。調整は坏部口縁がヨコナデ、脚部と体部は指押さえが顕著に残る。3は高杯脚部と考えられ、覆土中より出土した。調整は外面ヨコナデの後、縦方向のミガキ、内面ヘラナデが施されている。



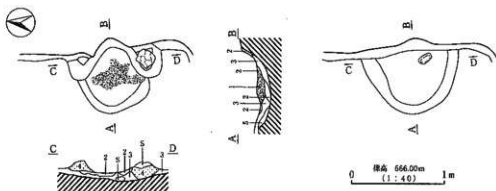
第8図 H1号住居址出土遺物実測図

(2) H 2号住居址 (第9.10図, 写真図版三・四)

本址はクー-14、ケー-14Grに位置する。M 2号溝状遺構と重複関係にあるが本址の方が新しい。残存状態は良好である。形態はほぼ方形を呈し、規模は北壁3.2m・東壁2.7m・南壁3.4m・西壁2.7mで、壁高は南西コーナーで16cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。



- 1層 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり、粘性あり、炭化物を含む。
- 2層 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性ややあり。炭土粒・炭化物を含む。
- 3層 灰黄褐色土(10YR4/2) 陥床。しまり、粘性あり。黄色ロームのブロック主体で、上面は硬質化している。



- 1層 赤褐色土(2.5YR4/3) 大球面。しまりあり、粘性弱い。上面は硬質化し、よく焼けている。
- 2層 暗赤褐色土(2.5YR3/5) しまり、粘性弱い。炭化物と焼土ブロック主体。
- 3層 褐色土(10YR4/4) しまり、粘性あり。白色の粘土・焼土ブロックを含む。
- 4層 褐色土(10YR4/6) しまり、粘性あり。褐色の粘土層。
- 5層 灰黄褐色土(10YR4/2) 陥床。しまり、粘性弱い。

第9図 H 2号住居址及びカマド実測図

主軸方位はN-85°-Eを示す。住居址の床面積は8.9㎡を測る。床はやや軟質であり、7cm程の厚さで貼られていた。覆土は1層で少量の炭化物を混入する。ピットは検出されなかった。掘り方は南側が一段高くなっており、北と南の段差は3cmを測る。また掘り方検出時に西壁の中央よりピットが検出された。規模は径40cmで深さ8cmを測る。

カマドは東壁やや南よりに検出された。規模は煙道部から火床面までの長さ80cm・幅65cmで、右袖が長さ35cm・床からの高さ6cm、左袖が長さ30cm・床からの高さ9cmをそれぞれ測る。形態は煙道部が住居址壁ラインよりも外に飛び出す形で、煙道は緩やかに立ち上がる。袖は右袖が軟質の自然石を、左袖が褐色の粘土をそれぞれ使用していた。火床面はよく焼けており焼土は硬質化していた。

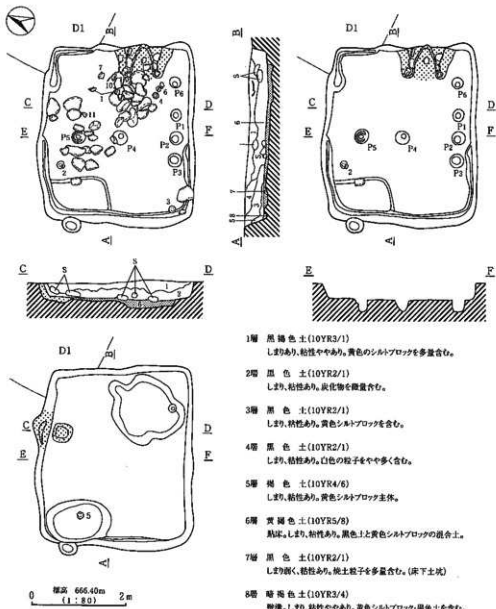
本址の出土遺物は、図示したものの他に覆土中より土師器甕片・坏片、須恵器坏片などが出土した。図示した1と2は須恵器坏で、1はカマドより、2は床面より出土した。調整は1の坏部がロクロヨコナデ、底部は回転ヘラ切りの後ナデ、2は坏部がロクロヨコナデ、底部は回転ヘラ切りの後、手持ちヘラケズリを施す。



第10図 H2号住居址出土遺物実測図

### (3) H3号住居址 (第11.12.13図, 写真図版五・六・七・八)

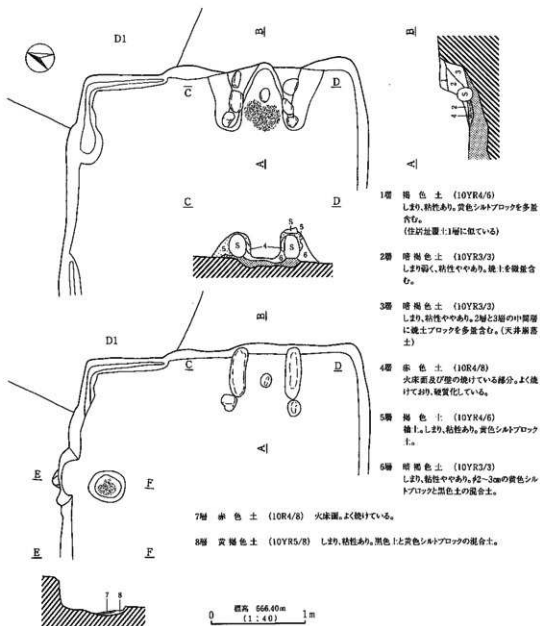
本址はケ-18.19、コー-18.19Grに位置する。D1号土坑、D9号土坑、D10号土坑と重複し、新旧関係は古い方よりD9号土坑・D10号土坑→本址→D1号土坑である。残存状態は北東コーナーをD1号土坑に壊されている他は良好である。形態はほぼ方形を呈し、規模は北壁3.5m・東壁2.8m・南壁3.6m・西壁2.95mで、壁高は南西コーナーで41cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-66°-Eを示す。住居址の床面積は9.2㎡を測る。床は硬質で、特に住居址中央部が顕著であり、厚さは深いところで16cmを測る。床はほぼ平坦であるが、北西コーナーに深さ4cmの一段低くなった部分が検出された。住居址覆土は4層に別れ炭化物を混入する。ピットは6カ所で検出された。何れも主柱穴とは考えづらいが、P1-P3とP6、P2、P4、P5は列をなし何らかの上層を支える柱穴と考えられる。規模は径が何れも26cm前後で、深さはP1が床からの深さ21cm、P2が深さ25cm、P3が深さ12cm、P4が深さ22cm、P5が深さ25cm、P6が深さ15cmを測る。壁溝は北東コーナーと北壁西よりから西壁と南壁西よりまで確認された。規模は、幅15cm・深さ7cmを測る。



第11図 H3号住居址実測図

本址の掘り方はほぼ平坦であるが北西コーナーと南東コーナーに床下土坑が確認された。北西コーナーのものは長軸1.38m、短軸0.9mで深さ18cmである。底面はほぼ平坦であり、底面より須恵器高台環の底部が出土した。この須恵器環は口縁部がすべて欠損しており、意図的な打ち壊しの様相を示す。南東コーナーの土坑は長軸1.42mで深さ12cmを測り、底面はやや凹凸があった。

カマドは北壁と東壁の2カ所確認されたが、検出状況より北壁のカマドの方が古く、最終的な使用は東壁のカマドと考えられる。まず東側のカマドは、東壁やや南よりに検出され、規模は煙



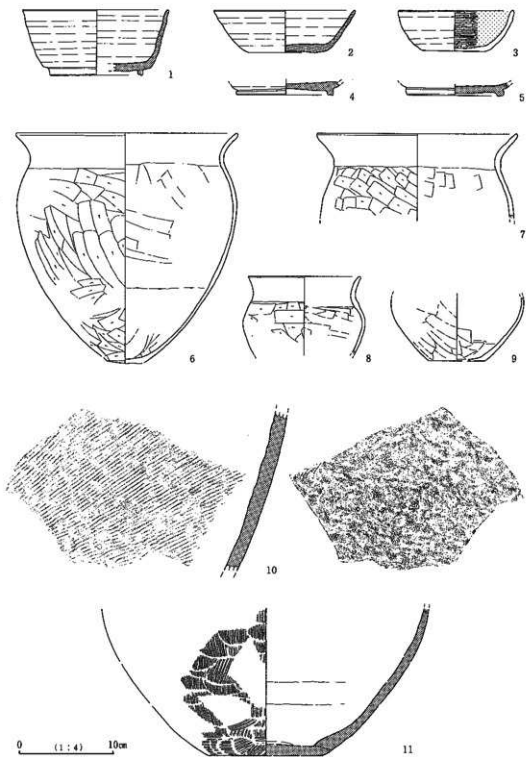
第12図 H3号住居址カマド実測図

道部から火床面までの長さ73cm・幅43cmで、右袖が長さ66cm・床からの高さ32cm、左袖が長さ65cm・床からの高さ26cmをそれぞれ測る。形態は煙道部が住居址壁ラインよりも外に飛び出さない形で、煙道は緩やかに立ち上がる。袖は両袖ともに芯材として河原石を使用しており右袖の石が長軸55cm・左袖の石が長軸52cmであり、両石の高さはほぼ水平であった。これら芯材は袖の構築土をいったん盛り上げた後に置いた事がセクションより観察された。また、右袖に使用された河原石は上面が磨かれていた。火床面は非常によく焼けており硬質化していた。

北側のカマドは北壁や東よりを検出された。火床面は貼床がかぶる状態で検出され、袖や袖の掘り込み等は確認されなかった。火床面と煙道部壁はよく焼けていた。

本址の出土遺物は、図示したものの他に覆土中より土師器甕片・坏片、須恵器甕片・坏片などが出土した。また、本址は掘り下げの途中に多量の河原石が検出された。河原石は住居址中央部分では床に接するものもあったが、大部分は床よりも浮いた状態で検出され、特に東壁と北壁側から流れ込んだ状態を示し、焼けている礫もあった。礫と共に須恵器甕片や土師器甕・坏なども混ざっており、これらの内の数点はH4号住居址出土の遺物と接合関係があった。

1, 4, 5は須恵器高台付坏である。1は河原石中の覆土上層より出土している。4は床面よりも5cmほど浮いた状態で出土した。5は北西コーナー部で検出された床下土坑中より出土した。調整は1が坏部クロコヨコナデ、底部が回転ヘラ切りの後高台を貼付してヨコナデを施している。4は底部が回転糸切りの後、高台を貼付している。5は底部が回転ヘラ切りの後横方向のヘラケズリを行い、高台を貼付しヨコナデを施している。また、5の底部中央は非常に滑らかに磨かれたような状態で、転用硯的な様相を示す。2は須恵器坏で、北壁や西よりの床面から出土した。出土時は口縁部が欠損していたが、接合作業を経て完形となった。調整は坏部内外面がクロコヨコナデで、底部が回転糸切り離しである。3は土師器坏で、南西コーナーの床面から出土した。残存状態は口縁部が一部摩耗したような状態であるが完形である。調整は坏部外面はヨコナデで、内面は黒色処理とともに、丁寧なミガキが施されている。6, 7は土師器甕である。6は4と同様に床から僅かに浮いた状態で出土した。残存状況は1/8程であるが、口縁部から底部までの器形はほぼ把握できた。調整は口縁部が内外面ヨコナデ、胴部外面と底部がヘラケズリ、胴部内面ナデが施されている。7は1と同様に覆土上層から出土した。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデを施している。8, 9は土師器小型甕である。8は床下土坑等から出土した小片が接合した。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデを施している。9はカマド内から出土した小片が接合した。胴部外面と底部ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデを施している。10, 11は須恵器甕で、10は川原石に混じって覆土上層から出土した。調整は外面が平行タタキ、内面が指押さえの様な痕跡が残る。11は10と同じく川原石に混じって覆土上層から出土したが、接合作業の段階でH4号住居址のカマドから出土した破片とM1号溝状遺構から出土した破片とそれぞれ接合関係にあることが解った。調整は外面が平行タタキ、内面がナデを施している。また、断面観察により底部は一枚の粘土板を使い胴部を積み上げていったことが解る。写真図版二十三の石は敲き石と磨り石と考えられる。何れも覆土中より出土した。



第13图 H3号住居址出土遗物实测图

#### (4) H4号住居址 (第14.15.16図, 写真図版九・十)

本址はク-18.19、ケ-18.19Grに位置する。東側が調査区外となるため住居址全体の2/3程の検出に止まったが、検出された部分についての残存状態は良好である。

形態はほぼ方形を呈し、規模は北壁4.28m・南壁2.4m(検出部分)・西壁4mで、壁高は南西コーナーで49cm・北壁で44cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-5.5°-Wを示す。住居址の床面積は検出部分で12.7㎡を測り、住居址全体では推定で約17㎡を測るものと考えられる。床は住居址中央とカマド付近については硬質であり、貼床は厚い所で16cm、薄い所で5cmを測る。覆土は4層に別れ、特に4層下層の床近くでは焼土及び炭化物が顕著に観察できた。また、北東コーナーの床部分には炭化物が薄く広がる状態で、住居址中央部と南壁中央よりには焼土の囲まりが検出された。

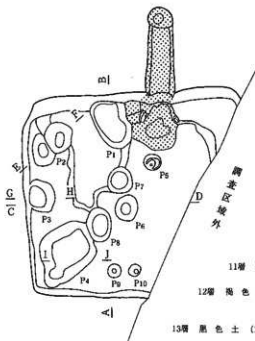
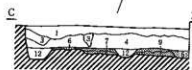
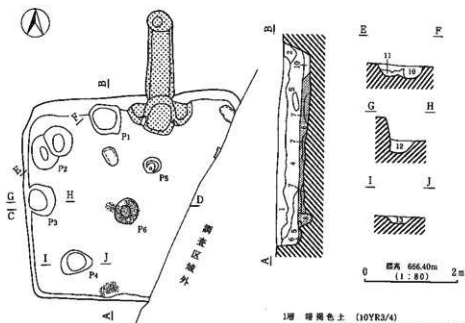
ピットは床上から6カ所、掘り方時に4カ所の計10カ所で検出されたが、何れも主柱穴的な位置には無く、何れも壁よりから検出された。規模はP1が径62cm・床からの深さ12cm、P2が長軸94cm・深さ29cm、P3が径64cm・深さ23cm、P4が径64cm・深さ17cm、P5が径33cm・深さ19cm、P6が径55cm・深さ18cm、P7が径53cm・深さ11cm、P8が径60cm・深さ14cm、P9が径26cm・深さ29cm、P10が径26cm・深さ35cmを測る。P2～P4は覆土中に炭化物と焼土が混入しており、遺物も土師器甕や須恵器甕が破砕した状態で出土した。これら遺物は復元作業を経ても形状を復元できるものではなく実測不能なものがほとんどであった。

カマドは北壁中央に検出された。規模は煙道部が長さ1.78m・幅58cm、火床面から壁までの長さ82cm・幅50cm、右軸が長さ45cm・床からの高さ14cm、左軸が長さ45cm・床からの高さ17cmをそれぞれ測る。形態は煙道部が住居址壁ラインよりも外に飛び出す形である。軸は両軸ともに芯材として河原石を使用し、その周りを粘土で固めている。火床面は軟質であったがよく焼けていた。

本址の出土遺物は、図示したもの他に覆土中より土師器甕片・坏片、須恵器甕片・坏片などが出土した。また、先にも述べたが本址出土の遺物は二つの遺構と接合関係がみとめられた。H3号住居址と接合関係があった図示不能であったが土師器甕と、M1号溝状遺構から出土した須恵器甕と接合した押図第13図11がある。

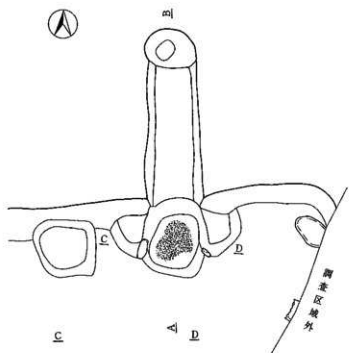
1は須恵器蓋であり、覆土中からの出土である。調整は内面とかえり部分はヨコナデ、天井部は回転ヘラケズリの後ヨコナデが施されている。2.3は須恵器坏である。2は覆土中から出土した。調整は体部内外面はロクロヨコナデ、底部は回転糸切り離しである。3は住居址北西コーナーのP2内から出土した。調整は体部内外面はロクロヨコナデ、底部は回転糸切り離しである。4は土師器甕である。住居址中央部の床面から口縁部を伏せたような状態で出土した。調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部内面ヘラナデ、胴部外面がヘラケズリを施している。5は土師器小甕で覆土中から出土した破片と掘り方検出時に出土した破片が接合した。調整は口縁部・胴部内外面





- 1層 暗褐色土 (10YR3/4) しまりあり、粘性ややあり、黄色のシルトブロックを含む。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/4) しまり、粘性あり、炭化物を微量含む。
- 3層 黄褐色土 (10YR5/8) しまり、粘性強い、黄色粘土ブロックを含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり、炭化物を含む。下層に焼土粒子を含ま、5層より黄色シルトブロックを含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性ややあり、炭化物-焼土粒子を含む。
- 6層 褐色土 (10YR4/6) 粘床、しまり、粘性あり、黄色シルトブロック-黒色土-焼土粒子を含む。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1) 粘床、しまり、粘性あり、黄色シルトブロックを微量含む。
- 8層 黒色土 (10YR2/1) 柱穴底、しまり弱く、粘性あり。
- 9層 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり、粘性強い、φ3~4cmの小石、ジャリを含み、沼澤原の様相を示す。
- 10層 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりやや弱く、粘性ややあり、黄色シルトブロックを微量含む。
- 11層 褐色土 (10YR4/6) しまり、粘性あり、焼土粒子-炭化物を含む。
- 12層 褐色土 (10YR4/6) しまり、粘性あり、焼土粒子-黄色シルトブロックを多量含む。下層に炭化物を含む。
- 13層 黒色土 (10YR2/1) しまり、粘性強い、炭化物-焼土粒子を多量含む。(カマドから捨てたような土)

第14図 H4号住居址実測図



標高 666.30m  
(1:40) 1m



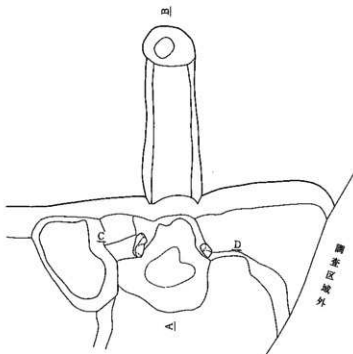
A層 黒褐色土 (10YR3/1)  
しまり、粘性強い。黄色シムトブロック・焼土粒子・炭化物を含む。

1層 褐色土 (10YR4/6)  
しまりあり、粘性強い。黄色の粘土と黒色土のブロック。

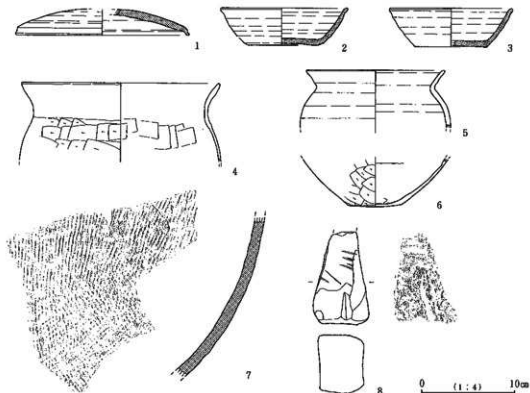
2層 暗褐色土 (10YR3/4)  
しまり、粘性あり。黄色の粘土と黒色土のブロック・焼土粒子を微量含む。

3層 暗褐色土 (10YR3/4)  
火床面。しまり弱く、粘性ややあり。黄色の粘土と焼土層。やや硬質化している。

4層 褐色土 (10YR4/6)  
しまり、粘性あり。黄色シムトブロック・黒色土・焼土粒子を含む。



第15図 H4号住居址カマド実測図



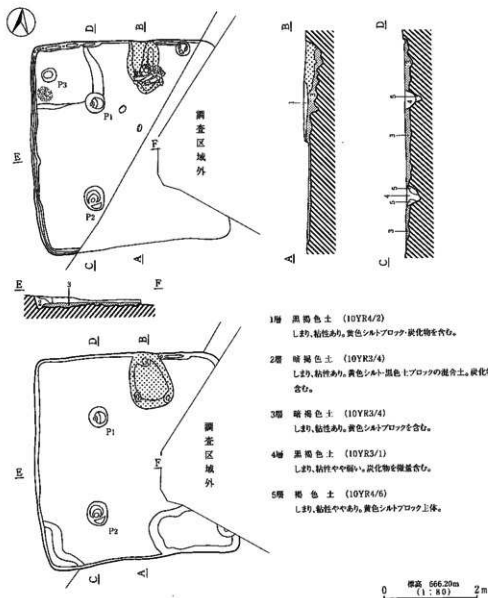
第16図 H4号住居址出土遺物実測図

ともにクロコヨコナデである。6は土師器甕の底部で、住居址西壁よりのP3内より出土した。調整は胴部外面と底部がヘラケズリ、胴部内面はナデが施されている。7は須恵器甕で、覆土中より出土した。調整は外面が平行タタキ目が残り、内面はナデが施されている。8は砥石で覆土中から出土した。

#### (5) H5号住居址 (第17.18図, 写真図版十一・十二・十三)

本址はカー-15.16、キ-15.16Grに位置する。検出状態は東側が調査区外となり、また東側から南壁の大部分が試掘調査時のトレンチにより上部が削平されている。残存状態の良いのは北西コーナー部分のみであり、住居址全体の1/2程の検出に止まった。

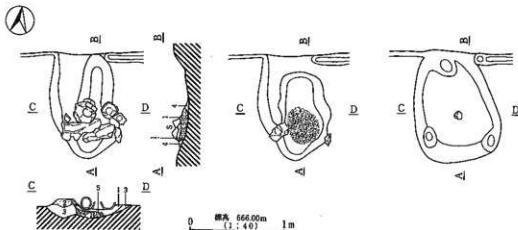
形態はほぼ方形を呈し、規模は北壁3.5m・南壁3.8m・西壁4.3mで、壁高は、南西コーナーで17cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-11°-Wを示す。住居址の床面積は12.6㎡、全体の推定値は約16㎡を測ると考えられる。床はやや軟質であり、貼床は厚い所で9cmを測る。覆土は2層に別れ炭化物を混入する。ピットは3カ所で検出された。P1-P2は支柱穴と考えられ、規模はP1が径40cm・床からの深さ47cm、P2が径50cm・深さ35cmを測る。ピット中には、



第17図 H5号住居址実測図

柱跡を示すセクションも観察された。壁溝は西壁のみ沿うように検出され、幅12cm・深さ3cmを測る。また、北西コーナー部には床より一段高い部分が確認された。高さは2cm、幅は1.2mで、壁よりにピットと焼上の固まりが検出された。ピットの規模は径30cm・深さ7cmである。使用目的は不明であるが、何らかの祭祀的遺構とも考えられる。

カマドは北壁中央に検出された。規模は煙道部から火床面までの長さ80cm・幅40cmで、左袖が長さ82cm・床からの高さ6cmを測る。右袖は一部しか確認できなかった。形態は煙道部が住居址



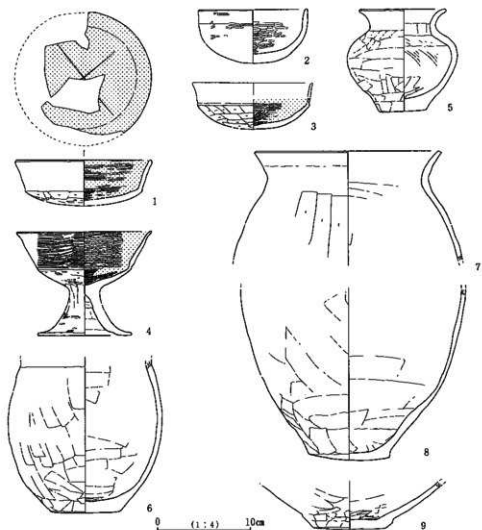
- 1層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり深く、粘粒あり。炭土粒子・炭化物を多量含む。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/4) しまり、粘性あり。微量の炭土粒下・相承層のブロックを含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり。赤色の鉄分の沈下したブロックあり。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性弱い。炭化物を含む。
- 5層 赤色土 (10R4/8) 火床面。しまりややあり、粘粒弱い。よく焼けている。

第18図 H 5号住居址カマド実測図

壁ラインよりも中に入る形で、煙道は緩やかに立ち上がる。火床面は硬質でよく焼けていた。軸は両軸ともに芯材として軟質の石を使用していた。検出時の二つの石は焚き口部の天井の石と考えられ、共に検出された土師器甕と壺はカマドの上に置かれていたものと考えられる。

本址の出土遺物は、そのほとんどがカマド内からのもので図示したものの他に土師器甕片・坏片等がある。

1から3は土師器環で、1・3は須恵器蓋を模倣したタイプで、2は古墳時代中期の段階から承継をもつタイプの坏である。何れもカマド内から出土した。1の調整は坏部外面ヨコナテ、底部外面ヘラケズリ、内面は「+」の刻みと丁寧なミガキが施されている。2は器面が荒れている為に内面の調整が不明瞭であるが、内外面とも全体に荒いミガキが施されている。3は底部外面ヘラケズリ、内面ミガキが施されている。4は土師器高坏である。試掘時にH 5号住居址東壁ぎわの床面より出土した。調整は坏部が内外面丁寧なミガキで、内面は黒色処理されている。脚部外面はナデの後ミガキ、内面はナデが施されている。5は土師器の小壺で、8の土師器甕の中に置かれるような状態で出土し、完形である。調整は口縁部内外面ヨコナテ、胴部はナデが施されている。6から9は土師器甕である。いずれもカマド内から出土した。7と8は同一個体と思われるが接合点は見いだせなかった。調整は6が胴部内外ヘラナデで胴部外面に一部煮焦げのような



第19図 H5号住居址出土遺物実測図

付着物が観察できる。7は口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ヘラナデ。8は胴部内外ヘラナデ。9も胴部内外面ヘラナデを施すが、一部外面にミガキの痕跡があり、底部から胴部下半の立ち上がり方から、9は胴部中位に最大径を持つ壺底部の可能性もある。また、カマド覆上より滑石製白玉1点が出土した。

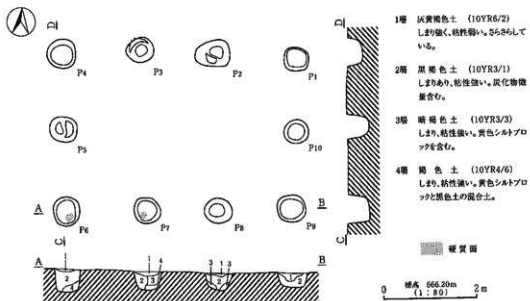
## 第2節 掘立柱建物址

### (1) F1号掘立柱建物址 (第20図, 写真図版十四①)

本址はクー-16.17、ケー-16.17Grに位置する。F2号掘立柱建物址と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が新しい。残存状況は良好である。

形態は東西方向に長い2間×3間の側柱式建物址で、長軸方位はN-84°-Eを示す。規模は東西4.9m・南北3.38mで、ピットに囲まれた空間面積は16.6㎡を測る。柱間の寸法はP4~P5が1.5mで、P6~P7が1.62mを測る。柱穴の形態はほぼ円形を呈し、掘り方はP2・P3・P5が底面が一段下がる二段掘りになっており、他の柱穴は素掘りの穴である。また、P6とP7はピット底面に柱の重みによる硬質面が確認された。規模はP1が径48cm・深さ34cm、P2が径58cm・深さ44cm、P3が径50cm・深さ42cm、P4が径62cm・深さ30cm、P5が径50cm・深さ46cm、P6が径60cm・深さ51cm、P7が径54cm・深さ37cm、P8が径52cm・深さ35cm、P9が径55cm・深さ35cm、P10が径50cm・深さ32cmを測る。

本址よりの出土遺物で図示できるものはなかったが、武蔵型に分類される土師器破片が少量出土している。



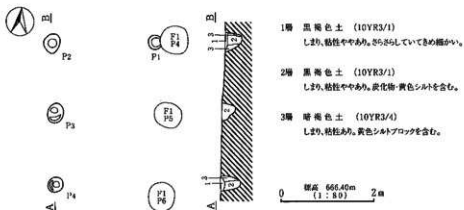
第20図 F1号掘立柱建物址実測図

### (2) F2号掘立柱建物址 (第21図, 写真図版十四②)

本址はコー-16.17Grに位置する。F1号掘立柱建物址と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。残存状況は東側のピット列がF1号掘立柱建物址によつて削平され検出できなかった。

形態は南北方向に長い1間×2間の側柱式建物址で、長軸方位はN-12°-Wを示す。規模は東

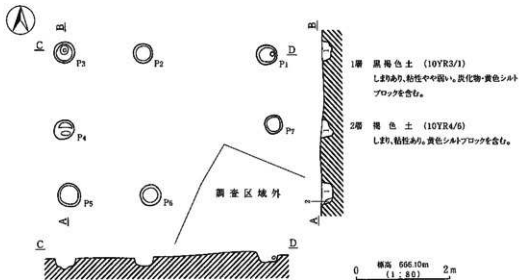
西2.22m・南北3mで、柱間の寸法はP2～P3が1.42mを測る。柱穴の形態はほぼ円形を呈し、掘り方はP3・P4が底面が一段下がる二段掘りになっており、他の柱穴は素掘りの穴である。規模はP1が径29cm・深さ29cm、P2が径40cm・深さ41cm、P3が径40cm・深さ40cm、P4が径32cm・深さ45cmを測る。本址よりの出土遺物で図示できるものはなかった。



第21図 F2号掘立柱建物址実測図

(3) F3号掘立柱建物址 (第22図, 写真図版十五①)

本址はキ-16.17、ク-16.17Grに位置する。残存状況は南東コーナーが調査区外となるためにピットが一カ所検出できなかった。



第22図 F3号掘立柱建物址実測図

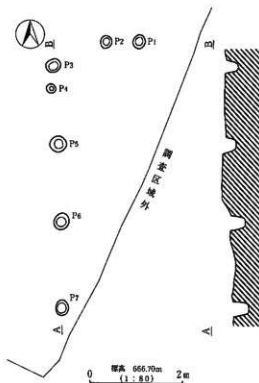


形態は東西方向に長い2間×2間の側柱式建物址で、長軸方位はN-84°-Eを示す。規模は東西4.34m・南北2.96mで、ピットに囲まれた空間面積は12.8㎡を測る。柱間の寸法はP1～P2が2.74mで、P2～P3が1.6m、P4～P5が1.4mを測る。柱穴の形態はほぼ円形を呈し、掘り方はP3・P4が底面が一段下がる二段掘りになっており、他の柱穴は素掘りの穴である。規模はP1が径42cm・深さ17cm、P2が径40cm・深さ15cm、P3が径44cm・深さ22cm、P4が径40cm・深さ23cm、P5が径48cm・深さ29cm、P6が径48cm・深さ24cm、P7が径38cm・深さ14cmを測る。F3号掘立柱建物址はF1号掘立柱建物址と長軸方位が一致しており、同時併存の可能性がある。

本址よりの出土遺物で図示できるものはなかった。

#### (4) F4号掘立柱建物址 (第23図, 写真図版十五②)

本址はケー-21.22Grに位置する。残存状況は東側が調査区外となるために全容は把握できなかった。形態は南北方向に長い側柱式建物址で、長軸方位はN-3°-Wを示す。規模は南北5.18mで、柱間の寸法はP3～P5が1.7m測る。柱穴の形態はほぼ円形を呈する。規模はP1が径26cm・深さ16cm、P2が径24cm・深さ17cm、P3が径28cm・深さ25cm、P5が径34cm・深さ53cm、P6が径32cm・深さ62cmを測る。F4号掘立柱建物址は全容不明の為に今回は掘立柱建物址として報告したが、或いは形態より構造的遺構とも考えられる。本址よりの出土遺物で図示できるものはなかった。



第23図 F4号掘立柱建物址実測図

### 第3節 土坑

#### (1) D1号土坑 (第24図, 写真図版十六①)

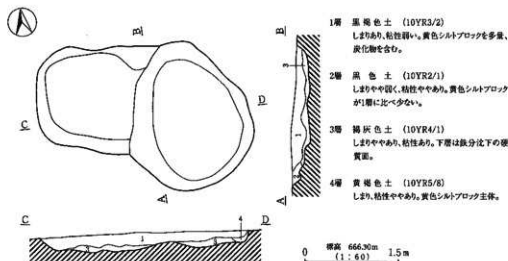
本址はケ-17.18Grに位置する。H3号住居址と重複関係にあるが、新旧関係は本址の方が新しい。残存状況は良好である。形態はいびつな楕円形を呈し、西側と東側で二つの土坑が重なった様になっている。西側の土坑の方が全体に浅い。東側の土坑底面は鉄分が沈下して凝結したような状態で硬質化している。壁はすり鉢状に立ち上がる。長軸方位はN-66°-Wを示す。遺物は図示したものの他に須恵器甕片、土師器甕片等がある。

#### (2) D2号土坑 (第25図, 写真図版十六②)

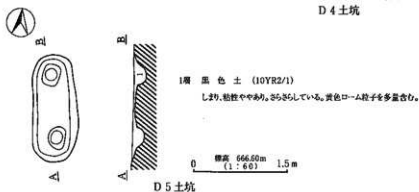
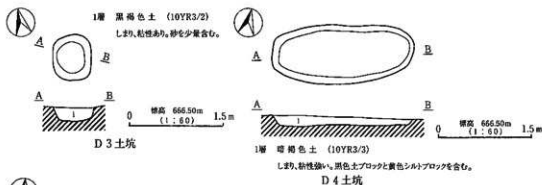
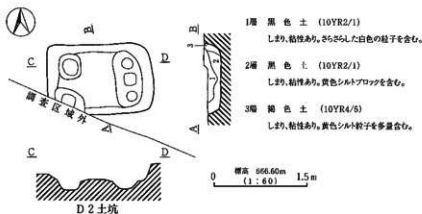
本址はシー-21Grに位置する。残存状況は良好であるが、南西コーナー部のみ調査区外となる。形態は方形を呈し、底面の四隅にピットが掘り込まれている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-90°-Eを示しほぼ真東を向く。規模は長軸1.7m、短軸1.1mで、ピットの深さは34-43cmを測る。本址の出土遺物は覆土中より土師器ロクロ甕片、土師器環片、灰胎陶器皿片などがあるが図示可能なものはなかった。

#### (3) D3号土坑 (第25図, 写真図版十六③)

本址はケ-21Grに位置する。残存状況は良好である。形態は方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-12°-Eを示す。規模は長軸70cm、深さは25cmを測る。



第24図 D1号土坑実測図



第25図 D 2 . 3 . 4 . 5 号土坑実測図

(4) D 4 号土坑 (第25図, 写真図版十七①)

本址はケ-20.21Grに位置する。残存状況は良好である。形態は細長い方形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。長軸方位はN-70°-Eを示す。規模は長軸2.25m、短軸95cmで、深さは14cmを測る。本址の上出遺物は覆土中より古墳時代と考えられる土師器甕片が少量出土したが図示可能なものはなかった。

(5) D5号土坑 (第25図, 写真図版十七②)

本址はコー21Grに位置する。残存状況は良好である。形態は細長い方形を呈し、北側と南側の底面にピットが掘り込まれている。壁は緩やかに立ち上がる。長軸方位はN-10°-Wを示す。規模は長軸が1.7m、短軸が70cmで、ピットの深さが北側が25cm、南側が21cmを測る。本址の出土遺物は覆土中より古墳時代と考えられる土師器甕片が少量出土したが図示可能なものはなかった。

(6) D6号土坑 (第26図, 写真図版十七③)

本址はケー12.13Grに位置する。残存状況は良好である。形態は細長い方形を呈し、底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-4°-Wを示す。規模は長軸1.15m、短軸50cmで、深さは20cmを測る。本址からの出土遺物はなかった。

(7) D7号土坑 (第26図, 写真図版十八①)

本址はコー13Grに位置する。残存状況は良好である。形態は細長い方形を呈し、底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-30°-Wを示す。規模は長軸1.23m、短軸44cmで、深さは25cmを測る。本址からの出土遺物はなかった。

(8) D8号土坑 (第26図, 写真図版十八②)

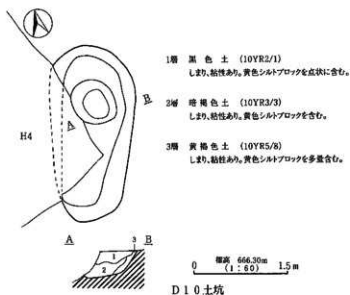
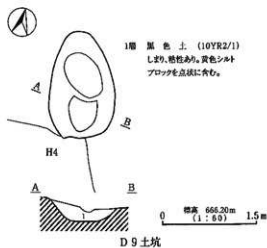
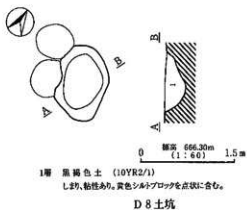
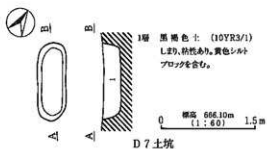
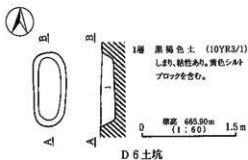
本址はコー18Grに位置する。残存状況は良好であるが、P15.16に西側を削平されている。形態はいびつな円形で底面はすり鉢状を呈する。壁はなだらかに立ち上がる。長軸方位はN-32°-Wを示す。規模は長軸1.18mで、深さは25cmを測る。本址の出土遺物は覆土中より古墳時代と考えられる土師器甕片が少量出土したが図示可能なものはなかった。

(9) D9号土坑 (第26図, 写真図版十八③)

本址はケー17.18Grに位置する。残存状況はH3号住居址とD1号土坑によって東側と南側が削平されている。形態はいびつな円形で、壁はなだらかに立ち上がる。長軸方位はN-17°-Wを示す。規模は長軸1.66mで、深さは51cmを測る。本址の出土遺物は覆土中より古墳時代と考えられる土師器甕片が少量出土したが図示可能なものはなかった。

(10) D10号土坑 (第26図, 写真図版十九①)

本址はケー18.19Grに位置する。残存状況はH3号住居址によって南側が削平されている。形態は楕円形で、壁はなだらかに立ち上がる。長軸方位はN-19°-Eを示す。規模は長軸2.75mで北側底面のピットの深さは50cmを測る。本址からの出土遺物はなかった。

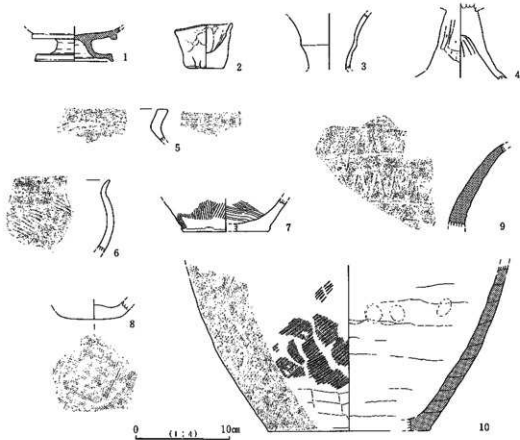


第26図 D 6 . 7 . 8 . 9 . 10号土坑実測図





本遺跡の土坑からの出土遺物は非常に少なく。図示した物の他にD2号土坑からロクロ土師器  
 甕・坏片1点、灰釉陶器皿片1点。D4・8・9号土坑から古墳時代後期と考えられる甕片が数点出  
 土しているのみである。1はD1号土坑から出土した須恵器である。器種は類例が乏しく判断が  
 つきにくいが高坏]系の器種と思われる。底部は回転ヘラズリが行われ、高台貼付と脚が付  
 られている。また坏部?と考えられる部分は意図的な破砕が行われているようである。2はD10  
 号土坑から出土した。手捏土器と思われるコップ形の器種である。明瞭な指押さへの跡が残る。  
 3~10はM1溝状遺構から出土した。3は土師器小型壺の口縁部でおそらく、須恵器甕の模倣品  
 と考えられる。調整は外面にミガキが僅かに残る。4は高坏の脚部である。調整は外面ヘラズ  
 リ後ナデ、内面ヘラナデが施されている。5と6は土師器甕の口縁部で、6は或いは小型鉢的な  
 器種かもしれない。調整は5が内外面ハケ目の残るナデで口縁部端部を面取りしている。6は外  
 面タタキ、内面ナデが施されている。7と8は土師器甕の底部で、7の調整は内外面ハケ目の残  
 るナデ、8は外面ハケ目の残るナデを規則的に行い、内面はヘラナデを施している。9は須恵



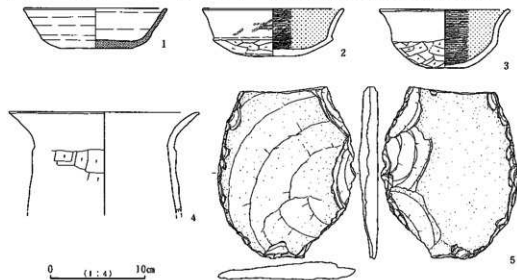
第29図 土坑・溝状遺構出土遺物実測図



器裏の口縁部付近で、波状の施紋が行われている。10は須恵器甕の底部から胴部で外面の調整が平行タタキ目、内面は指押さえの後ナデが施されている。また、明瞭に輪積痕が残る。

## 第5節 遺構外出土遺物 (第30図)

1は遺跡南東コーナー付近ケ-22Grより出土した。調整は底部回転ヘラ切離し、体部はロクロヨコナデを施す。また、本遺物は胎土が非常に白い。2は試掘時にク-20Grより出土した。ほぼ完形で、調整は底部ヘラケズリの後ナデ、口縁部はナデの後ミガキ、内面はナデの後丁寧なミガキを施し黒色処理をしている。3はH4号住居址の貼床から出土したが、H4号住居址とは時期が異なるため、遺構外遺物として扱った。調整は底部外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、内面丁寧なヘラミガキを施している。4は土師器甕でク-18Grより出土した。調整は胴部外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、内面ナデが施されている。5は打製石斧でケ-13Grより出土した。一部を欠損しているので全体形状は不明であるが、刃は内刃を意識し両平刃である。石の厚みは非常に薄く刃先の摩耗は見られないが斧というよりは「鑿」的な使用を連想させる形状である。



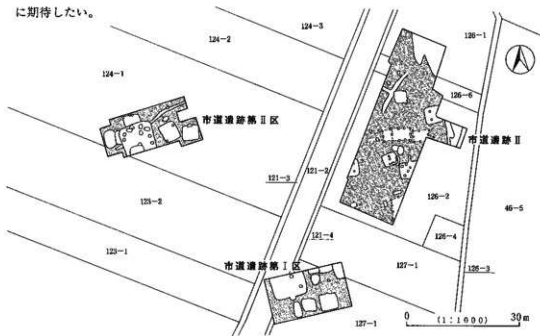
第30図 遺構外遺物実測図

## 第V章 調査のまとめ

ここでは、今回の調査について簡単にまとめてみたい。まず、昭和49年度の調査地点との関連であるが、残念ながら前回の調査地点とはやや距離があるために直接関連する遺構は見いだせない。しかし、今回の遺構分布が前回の調査地点に比べてまばらであることから、集落の中心はやはり沖積微高地の中央部分である南西側のようなのである。

また、注目される遺構としてはM1号溝状遺構があげられる。この溝は本文中でも触れたが圃場整備前の地図にも記載されている流路である。現に、表上剥ぎの段階では上層より近現代の遺物も検出されていた。しかし、位置と深さを少しずつ変えてはいるが、中世から古墳時代まで連続と継続している溝であることが解った。このことは、遺跡周辺の地形が時代を経てもさほど変化していないことを示しており、少なくとも古墳時代中期以降は安定的な生活空間を確保できたと考えられる。千曲川下流域の更埴・善光寺平と異なり、野沢周辺は以外と自然災害の少ない場所であり、冷涼な気候を克服すれば良好な水田地帯として利用できたのであろう。

最後に、前回この遺跡が調査されたのは今からちょうど30年前に当たる。この30年の間に埋蔵文化財を取り巻く環境は大きく変わり、また調査の技術も研究も進歩した。然るに今回の発掘調査とこの調査報告書がそれらの成果を踏まえているかと自問すれば、少なくとも報告書「市道」に注がれたものには追いついていないと認めなければならないであろう。自戒の意味も含め次回に期待したい。



第31図 市道遺跡及び市道遺跡II遺構全体図

1号住居址出土土器観察表

標 番 号	器種	法 量 (cm)			成 形 ・ 調 整	胎 土 色 調
		口径	器高	器径		
8-1	土師器 高杯	--	(8.7)	6.8	外面 内面 刷毛目の残るナデ ヘラナデ	径1mm以下の白色粒子を含む 5YR5/2 灰褐色
8-2	手捏ね	6.2	4.7	4.0	外面 内面 指押さえた後ナデ、口縁部ヨコナデ ナデ、口縁部ヨコナデ	緻密 5YR4/1 褐色
8-3	土師器 高杯	--	(4.7)	--	外面 内面 ナデの後戻いミガキ ヘラナデ	径1mm以下の白色粒子を含む 10R6/6 赤褐色

2号住居址出土土器観察表

10-1	須恵器 高杯	13.6	3.95	6.6	外面 内面 ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ ロクロヨコナデ	径1mm以下の白色・黒色粒子を含む N8/0 灰白色
10-2	須恵器 高杯	13.8	3.95	7.4	外面 内面 ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリ ロクロヨコナデ	径1mm以下の白色・黒色粒子を含む 10Y5/1 灰色

3号住居址出土土器観察表

13-1	須恵器 高白杯	15.5	7.0	9.9	外面 内面 ロクロヨコナデ、底部回転ヘラキリの後高台貼付 ロクロヨコナデ	径1mmの白色粒子を含む、黒色の黒点 10GY6/1 緑灰色
13-2	須恵器 高杯	15.0	4.5	8.1	外面 内面 ロクロヨコナデ、底部回転糸切り隠し ロクロヨコナデ	径1mmの白色粒子を含む。 10GY6/1 緑灰色
13-3	土師器 高杯	12.4	4.4	6.6	外面 内面 ヨコナデ ミガキと黒色処理	径1mmの白色・赤色粒子を少量含む 7.5YR6/6 褐色
13-4	須恵器 高白杯	--	(1.4)	10.3	外面 内面 底部回転糸切りの後高台貼付 ロクロヨコナデ	径1mmの白色粒子を含む、黒色の黒点 N5/ 灰色
13-5	須恵器 高白杯	--	(1.4)	10.4	外面 内面 底部回転ヘラキリの後高台貼付、他部ミガキ ロクロヨコナデ	径1mmの白色粒子を含む。 10GY6/1 緑灰色
13-6	土師器 高杯	23.5	24.5	4.3	外面 内面 底部から胴部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ 底部から胴部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ	径1mmの白色・赤色粒子を少量含む 2.5YR7/6 褐色
13-7	土師器 高杯	21.5	(9.0)	--	外面 内面 胴部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ	径1mmの白色・赤色・黒色粒子を少量含む 7.5YR6/3 に近い褐色
13-8	土師器 高杯	12.0	(8.3)	--	外面 内面 胴部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ	径1mmの白色・赤色・黒色粒子を少量含む 7.5YR6/3 に近い褐色
13-9	土師器 高杯	--	(6.9)	8.0	外面 内面 ヘラケズリ ヘラナデ	径1mmの白色・赤色粒子を含む 5YR7/3 に近い褐色
13-10	須恵器 高杯	--	--	--	外面 内面 平行タタキ目 指押さえた	径1mmの白色粒子を多く含む N5/ 灰色
13-11	須恵器 高杯	--	(15.6)	11.8	外面 内面 平行タタキ目 ナデ	径1mmの白色・黒色粒子を含む 5R6/1 赤灰色

4号住居址出土土器観察表

16-1	須恵器 高杯	18.4	2.8	--	外面 内面 かえり部ロクロヨコナデ、天骨部回転ヘラケズリ ロクロヨコナデ	径1mm以下の白色・黒色粒子を含む N5/ 灰色
16-2	須恵器 高杯	13.1	3.95	7.2	外面 内面 胴部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り ロクロヨコナデ	径1mm以下の白色粒子を含む 10G5/1 緑灰色
16-3	須恵器 高杯	13.2	4.1	7.6	外面 内面 胴部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り ロクロヨコナデ	径1mm以下の白色粒子を含む 10G5/1 緑灰色
16-4	土師器 高杯	21.0	(8.4)	--	外面 内面 胴部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ	径1mm以下の白色粒子を含む 7.5YR6/6 褐色
16-5	土師器 高杯	14.8	(6.1)	--	外面 内面 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ	緻密 径1mm以下の赤褐色粒子を含む 7.5YR8/4 淡黄色褐色
16-6	土師器 高杯	--	(5.1)	5.7	外面 内面 ヘラケズリ ナデ	径1mm以下の白色・黒色粒子を含む 7.5YR7/4 に近い褐色
16-7	須恵器 高杯	--	--	--	外面 内面 平行タタキ目 ナデ	径1mmぐらいの白色粒子を多く含む N6/ 灰色

5号住居址出土土器観察表

神 器 番 号	器 種	法 様 (cm)			成 形 ・ 調 整		給 土 色 調
		口径	器高	底径	外 面	内 面	
19-1	土師器 杯	14.5	4.8	11.9	外面 内面	白粉部ヨコナテ、底部ヘラケズリ ミガキ「+」の刻みあり。黒色処理	径3mm以下の赤色粒子を含む。 10YR8/3 淡黄棕色
19-2	土師器 杯	11.7	4.7	---	外面 内面	ミガキ ミガキ	径1mm以下の赤・黒・白色粒子を含む。 7.5YR7/4 に近い棕色
19-3	土師器 杯	---	(3.4)	12.0	外面 内面	底部ヘラケズリ ミガキ。黒色処理	径1mm以下の白色粒子を含む。 7.5YR7/4 に近い棕色
19-4	土師器 高杯	14.4	11.0	10.0	外面 内面	外面 耳口縁部ヨコナテ底部ヘラケズリの後 胴部も含めミガキ 内面 杯部ミガキの後黒色処理、胴部ナテ	粗面 径1mm以下の白色粒子を少量含む。 5YR5/6 明赤褐色
19-5	土師器 壺	9.3	10.9	5.1	外面 内面	口縁部ヨコナテ、胴部から底部ナテ 口縁部ヨコナテ、胴部から底部ナテ	径1~2mm以下の白・赤色粒子を含む 7.5YR5/4 に近い棕色
19-6	土師器 壺	---	(16.2)	7.3	外面 内面	口縁部ヨコナテ、胴部・底部ナテ ヘラナテ	径1mm以下の黒・白色粒子を含む。 7.5YR5/4 淡黄棕色
19-7	土師器 壺	20.0	(11.7)	---	外面 内面	口縁部ヨコナテ、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナテ、胴部ヘラナテ	径1mm以下の赤・白色粒子を含む。 7.5YR8/4 淡黄棕色
19-8	土師器 壺	---	(18.1)	8.6	外面 内面	ヘラナテ ヘラナテ	径2mm以下の白色粒子を含む。 7.5YR8/4 淡黄棕色
19-9	土師器 壺	---	(4.9)	7.6	外面 内面	ヘラナテ ヘラナテ	径1mm以下の赤・黒・白色粒子を含む。 7.5YR7/4 に近い棕色

溝状遺構・遺構外遺物土器観察表

29-1	須恵器 高杯	---	(3.7)	---	外面 内面	胴部ロクロヨコナテ、底部同様にヘラ切りの後黒色処理	径1mm以下の白色粒子を含む。 N5/ 灰色
29-2	手ねね 土器	6.2	4.7	3.9	外面 内面	指押さへ 指押さへ	径2mm以下の白・黒色粒子を含む。 7.5YR5/4 に近い棕色
29-3	土師器 ハコウ	---	(5.6)	---	外面 内面	ナテの後ミガキ? 摩耗して不明	径2mm以下の白色粒子を含む。 7.5YR7/4 に近い棕色
29-4	土師器 高杯	---	(7.8)	---	外面 内面	ヘラケズリ ヘラナテ	径2mm以下の白・黒色粒子を含む。 7.5YR7/2 明褐色
29-5	土師器 壺	---	---	---	外面 内面	ハケ目の残るナテ ハケ目の残るナテ	径2mm以下の白・黒色粒子を含む。 5YR5/8 明赤褐色
29-6	土師器 壺	---	---	---	外面 内面	タタキ目 ナテ	径2mm以下の白・黒色粒子を含む。 5YR5/1 褐色
29-7	土師器 壺	---	---	9.0	外面 内面	ハケ目の残るナテ ハケ目の残るナテ	径2mm以下の白色粒子を含む。 2.5YR4/8 赤褐色
29-8	土師器 壺	---	---	---	外面 内面	ハケ目の残るナテ ヘラナテ	径2mm以下の白色粒子を含む。 5YR5/8 明赤褐色
29-9	須恵器 壺	---	---	---	外面 内面	波状文 ナテ	径3mm以上の黒色粒子を含む。 7.5Y4/1 灰色
29-10	須恵器 壺	---	(17.6)	17.0	外面 内面	平行タタキ目 指押さへの後ナテ	径3mm以上の黒色粒子を含む。 N5/ 灰色
30-1	須恵器 杯	15.3	4.2	7.6	外面 内面	ロクロヨコナテ、底部同様にヘラ切り無し ロクロヨコナテ	径1mm以下の赤色粒子を含む。 N8/ 灰色
30-2	土師器 杯	15.0	5.0	---	外面 内面	底部ヘラケズリ、口縁部ヨコナテ 丁寧なミガキ、黒色処理	径2mm以下の白・赤色粒子を含む。 7.5YR7/4 に近い棕色
30-3	土師器 杯	14.0	6.2	---	外面 内面	口縁部ヨコナテ、底部ヘラケズリ 丁寧なミガキ、黒色処理	径1mm以下の白色粒子を含む。 2.5YR6/8 褐色
30-4	土師器 壺	20.2	(10.5)	---	外面 内面	口縁部ヨコナテ、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナテ、胴部ナテ	径2mm以下の白・赤色粒子を含む。 7.5YR7/4 に近い棕色



①H1号住居址全景（南より）



②H1号住居址掘り方全景（西より）



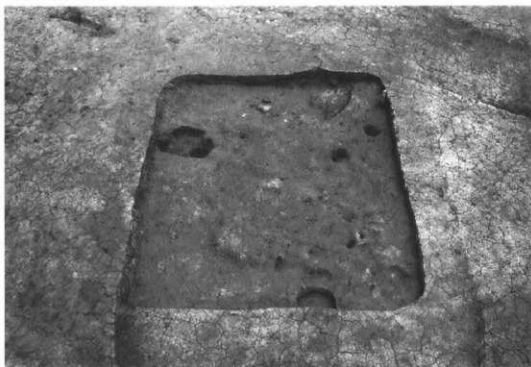
①H1号住居址貯蔵穴全景（西より）



②H1号住居址遺物出土状況全景（東より）



①H 2号住居址全景（西より）



②H 2号住居址掘り方全景（西より）



①H 2号住居址カマド全景（西より）



②市道遺跡II調査風景（南西より）





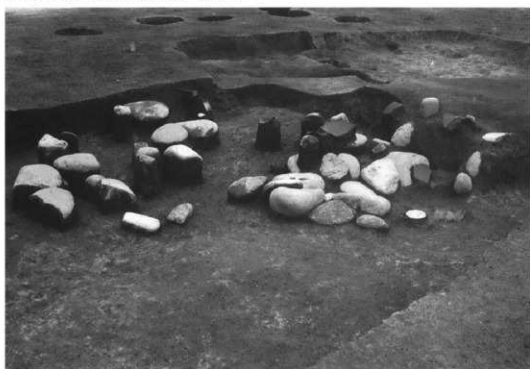
①H 3号住居址全景（西より）



②H 3号住居址掘り方全景（西より）



①H 3号住居址遺物出土状況全景（西より）



②H 3号住居址遺物出土状況近景（南西より）



①H3号住居址カマド全景（西より）



②H3号住居址カマド掘り方全景（西より）



①H3号住居址北壁カマド全景（南より）



②H3号住居址床下土坑全景（南より）



①H4号住居址全景（西より）



②H4号住居址掘り方全景（西より）



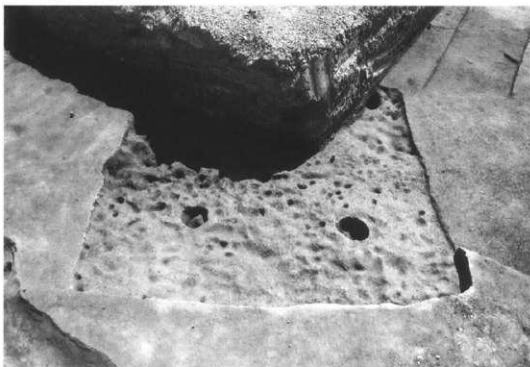
①H4号住居址カマド全景（南より）



②H4号住居址カマド掘り方全景（南より）



①H5号住居址全景（西より）



②H5号住居址掘り方全景（西より）



①H5号住居址カマド出土遺物全景（南より）



②H5号住居址カマド遺物出土状況（北より）

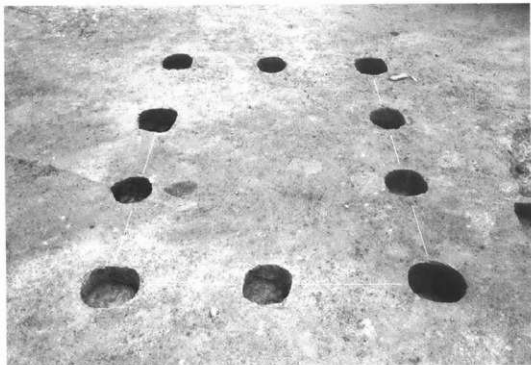




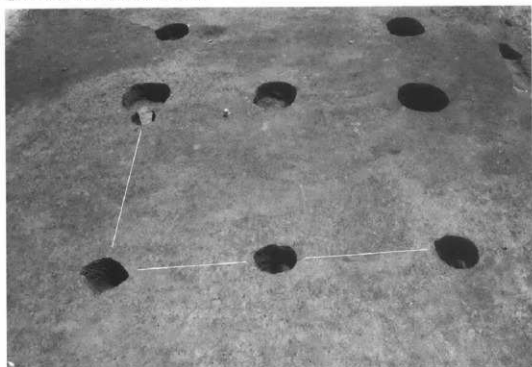
①H 5号住居址カマド全景（南より）



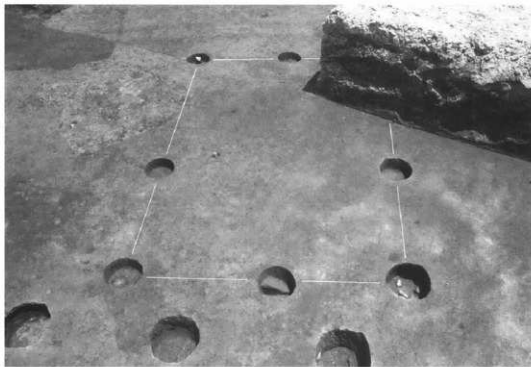
②H 5号住居址カマド掘り方全景（南より）



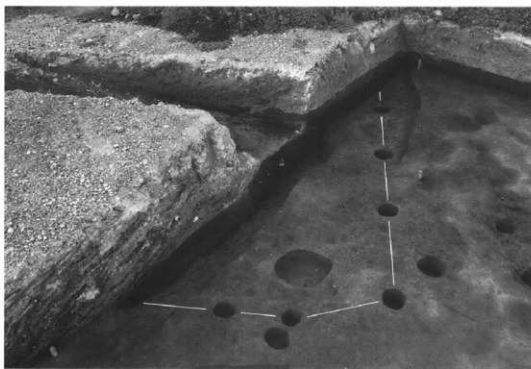
① F 1号掘立柱建物址全景（西より）



② F 2号掘立柱建物址全景（西より）

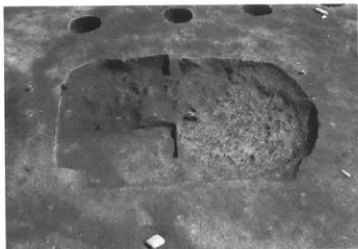


①F 3号掘立柱建物址全景（西より）



②F 4号掘立柱建物址全景（北より）

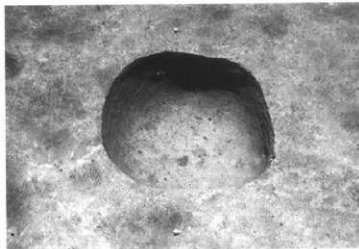
①D 1号土坑全景  
(南より)



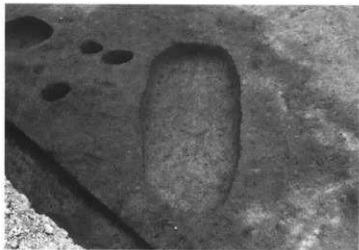
②D 2号土坑全景  
(北より)



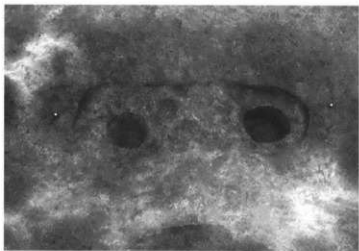
③D 3号土坑全景  
(北より)



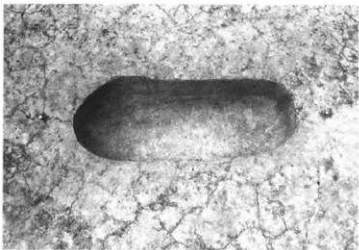
①D4号土坑全景  
(北東より)



②D5号土坑全景  
(東より)



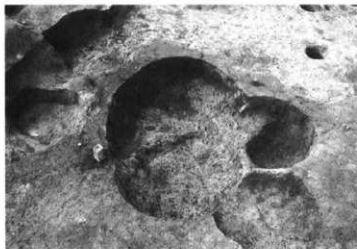
③D6号土坑全景  
(北東より)



①D 7号土坑全景  
(北より)



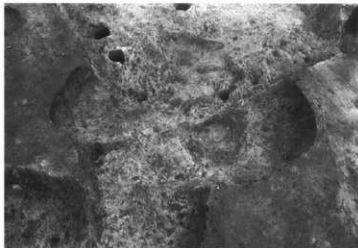
②D 8号土坑全景  
(北より)



③D 9号土坑全景  
(北より)



①D10号土坑全景  
(東より)



②M1号溝状遺構全景  
(西より)



③M2.3号溝状遺構全景  
(北より)





H1 8-1



H1 8-2



H1 8-3



H2 10-2



H3 13-1



H3 13-3



H3 13-4



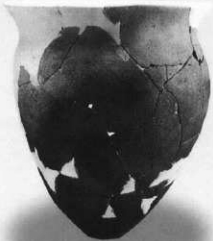
H3 13-5



H3 13-2

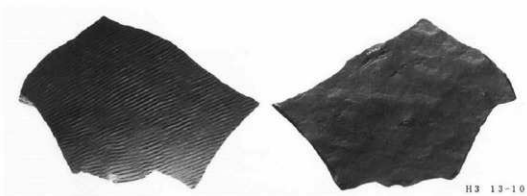


H3 13-7



H3 13-6





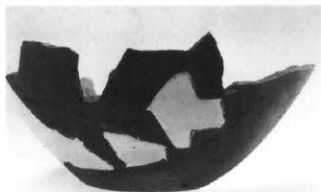
H3 13-10



H3 13-8



H3 13-9



H3 13-11



H4 16-1



H4 16-2



H4 16-3



H4 16-4



H4 16-7



H4 16-8



H4 16-5



H5 19-1



H5 19-4



H5 19-9



M1 29-10



H5 19-2



H5 19-3



H5 19-7



H5 19-5



H5 19-6



H5 19-8



D1 29-1



D10 29-2



M1 29-3



M1 29-5



M1 29-4



M1 29-6



M1 29-8



M1 29-9



Gr 30-1



Gr 30-2



Gr 30-3



Gr 30-4



Gr 30-5



M1



H3

H3

H4



H4



試器 1ドレ



試器 1ドレ

土器と30-541/4  
M1H井~H4層G42/3  
土製石製時鐘中は実寸

佐久市埋蔵文化財調査報告書

- |      |                              |      |   |
|------|------------------------------|------|---|
| 第1集  | 『金井城跡』                       | 第37集 | 『西一本樺遺跡Ⅱ 中西ノ久保遺跡Ⅰ』                                |
| 第2集  | 『市内遺跡発掘調査報告書1990』            | 第38集 | 『南下中原遺跡Ⅱ』   |
| 第3集  | 『石附宮址群Ⅲ』                     | 第39集 | 『中屋敷遺跡』   |
| 第4集  | 『大ふけ』                        | 第40集 | 『寺畑遺跡』  |
| 第5集  | 『立科F遺跡』                      | 第41集 | 『曾根新城遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ<br>上久保田向遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ<br>西曾根遺跡Ⅱ・Ⅲ』 |
| 第6集  | 『上曾根遺跡』                      | 第42集 | 『寄山』  |
| 第7集  | 『三貫畑遺跡』                      | 第43集 | 『植現平遺跡・池端遺跡』                                      |
| 第8集  | 『蔵の下遺跡』                      | 第44集 | 『寺添遺跡』  |
| 第9集  | 『国道141号線関係遺跡』                | 第45集 | 『市内遺跡発掘調査報告書1994』                                 |
| 第10集 | 『聖原遺跡Ⅱ』                      | 第46集 | 『濁り遺跡』  |
| 第11集 | 『赤穂垣外遺跡』                     | 第47集 | 『上芝宮遺跡Ⅴ』  |
| 第12集 | 『若宮遺跡Ⅱ』                      | 第48集 | 『池端城跡』  |
| 第13集 | 『上高山遺跡Ⅱ』                     | 第49集 | 『根々井芝宮遺跡』   |
| 第14集 | 『栗毛坂遺跡』                      | 第50集 | 『藤塚遺跡Ⅲ』   |
| 第15集 | 『野馬久保遺跡』                     | 第51集 | 『寺中遺跡 中屋敷遺跡Ⅱ』                                     |
| 第16集 | 『石堂城跡』                       | 第52集 | 『坪の内遺跡』   |
| 第17集 | 『市内遺跡発掘調査報告書1991』<br>(1月～3月) | 第53集 | 『町正坊遺跡Ⅱ』  |
| 第18集 | 『西曾根遺跡』                      | 第54集 | 『市内遺跡発掘調査報告書1995』                                 |
| 第19集 | 『上芝宮遺跡』                      | 第55集 | 『番屋前遺跡Ⅰ・Ⅱ』  |
| 第20集 | 『下聖端遺跡Ⅲ』                     | 第56集 | 『聖原遺跡Ⅳ』   |
| 第21集 | 『金井城跡Ⅲ』                      | 第57集 | 『高師町遺跡Ⅱ』  |
| 第22集 | 『市内遺跡発掘調査報告書1991』            | 第58集 | 『下穴虫遺跡Ⅰ』  |
| 第23集 | 『兩上中原・南下中原遺跡』                | 第59集 | 『市内遺跡発掘調査報告書1996』                                 |
| 第24集 | 『上聖端遺跡』                      | 第60集 | 『曾根城遺跡Ⅱ』  |
| 第25集 | 『上久保田向Ⅳ』                     | 第61集 | 『淵床遺跡』  |
| 第26集 | 『藤塚古墳群・藤塚Ⅱ』                  | 第62集 | 『野馬久保遺跡Ⅱ』   |
| 第27集 | 『上久保田向Ⅲ』                     | 第63集 | 『西大久保遺跡Ⅲ』   |
| 第28集 | 『曾根新城Ⅴ』                      | 第64集 | 『梨の木遺跡Ⅳ』  |
| 第29集 | 『前村遺跡B 山法師遺跡B』               | 第65集 | 『中宿遺跡』  |
| 第30集 | 『市内遺跡発掘調査報告書1992』            | 第66集 | 『中西ノ久保遺跡Ⅱ 仲田遺跡 寺畑遺跡Ⅱ』                             |
| 第31集 | 『山法師遺跡A 筒村遺跡A』               | 第67集 | 『供養塚遺跡』   |
| 第32集 | 『東ノ野』                        | 第68集 | 『前藤部遺跡』   |
| 第33集 | 『聖原遺跡Ⅶ 下曾根遺跡Ⅰ<br>前藤部遺跡2』     | 第69集 | 『高山遺跡Ⅰ・Ⅱ』   |
| 第34集 | 『西一本樺遺跡Ⅰ』                    | 第70集 | 『観音堂遺跡』   |
| 第35集 | 『市内遺跡発掘調査報告書1993』            | 第71集 | 『市内遺跡発掘調査報告書1997』                                 |
| 第36集 | 『蛇塚B遺跡Ⅲ』                     |      |   |

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第72集

市道遺跡Ⅱ

長野県佐久市三塚市道遺跡Ⅱ発掘調査報告書

1999年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市大字中込3056

埋蔵文化財課

〒385-0006 長野県佐久市大字志賀5953

TEL 0267-68-7321

印刷所 株式会社 櫻 (いっい)

